

# みあかり



皇大神宮「遷御の儀」

[写真提供 神宮司庁]

## 目次

- 「おもてなしの国 伊勢」 P 2～3
- 第62回神宮式年遷宮を奉仕して P 4
- 「怠ルコトナシ」波多神社の特殊神饌 P 5
- 耳常神社雅楽会の結成 P 6
- 伝統行事の復活から御造営へ P 7
- 美多羅志神社の龍神様 P 8

## 教化特集号 第22号

三重県神社庁  
庁報編集委員会

# 「おもてなしの国 伊勢」

伊勢市長

鈴木健一



昨年は「第六十二回神宮式年遷宮」のクライマックスとなる「遷御の儀」が、十月二日に内宮において、十月五日に外宮において、厳かに行われました。また、昨年の伊勢神宮参拝者数は一四二〇万人を超え、多くの観光客にお越しいただき、大変

にぎわいのある年となりました。特に外宮への参拝者数については、前年に比べて二倍以上となり、伊勢市駅から外宮へとつながる「外宮参道」は、平日・休日に関わらず多くの観光客の皆様でにぎわうようになりました。これも遷宮前から取り組んできた関係団体の皆様をはじめとした、市民の方々の多大なご尽力の賜物であると感じております。中でもお伊勢参りの慣わしである「外宮から内宮へ」を情報発信するとともに、神宮を核とした誘客など、外宮及び外宮前の魅力を創出するための

様々な取り組みを行ってきた結果であると考えております。また、外宮界限のにぎわいは、「せんぐう館」の存在が非常に大きいと感じております。「せんぐう館」は、第六十二回神宮式年遷宮を記念して創設され、式年遷宮の祭事や社殿、御装束・神宝の技術などが紹介展示されております。中でも社殿の御扉の実物や「外宮正殿」の原寸大模型など、これまでは身近に感じることでできなかった社殿の壮大さをすぐそばで見ることができ、その建築様式の美しさや神々しい存在感に

は、圧倒されるばかりです。今回の遷宮を迎えるにあたり、伊勢市では御遷宮対策事務局を設置し、官民連携して、たくさん準備を行ってきました。特に、平成十八年と十九年に行われた「お木曳行事」では、「神領民」とよばれる市民の皆様や、全国からお集まりいただいた「特別神領民」の皆様の手により、木遣唄（きやりうた）とともに、御用材を両宮へ曳き入れられました。また、昨年の夏に行われた「お白石持行事」では、全国から七万人を超える「特別神領民」の皆様をお迎えしました。市民の皆様も、「神領民」としてお白石を奉獻するとともに、さまざまな場面・方法で「おもてなし」の心を持って、「特別神領民」の方々をお迎えしていただきました。私も至る所でその心に触れることができ、大変心温まりました。遷宮はこれからも続きます。

すでに内宮の第一別宮である「荒祭宮」と、外宮の第一別宮である「多賀宮」の遷御が執り行われ、今後「月読宮」「倭姫宮」「月夜見宮」などの別宮がこれに続きます。別宮全ての遷宮が終了するのは、平成二十七年初めごろになると伺っております。

伊勢市では、本年二月に「別宮御白石奉献団連合会」が結成されました。今後、別宮のお白石持行事に向けて準備を進めていきます。

このように、伊勢神宮とともに歴史を紡いできた伊勢市ですが、天照大御神が「美し国」と仰せられたように、海の幸と、大地の恵みにより、多くの美味が育まれてきました。

「伊勢うどん」は伊勢参りの旅人に素早く出す為に考えられた江戸時代のファストフードでした。勿論、今も伊勢の名物として人気を誇るメニューで、も

ちもちとしたやわらかい麺が注目をあびています。

さらに、豊受大御神が「食の神様」であることから、食の大切さを外宮前から発信しようと、市民の方々はじめ関係団体の皆様が集まり、今回のご遷宮にむけて、外宮さんにちなんだ井「御饌井（みけどん）」を生み出しました。現在、外宮周辺など市内の十数店舗で提供していたいております。

伊勢志摩の食材を活かし、各店で工夫された御饌井は、食べ比べもまた楽しい伊勢の新しい食の名物となっております。

さて、昨年の東京オリンピックの誘致レセプション以降、「おもてなし」という言葉に注目が集まっています。江戸時代に国中の人々が伊勢を訪れた「お伊勢参り（おかげ参り）」は、白米のおにぎりやお風呂を無償で提供するなど、「施行（せぎょう）」と言う伊勢の人々の「お

もてなし」に支えられていました。このように、古くから根付く伊勢の「おもてなし」の心は、どこにも負けないと確信しております。この心をもって、今後は「世界の伊勢」に向け、伊勢の魅力を世界へ発信し、国内外を問わず多くの皆様をお迎えできるように取り組んでまいりたいと考えております。

今年も、おかげ年でもあり、昨年に引き続き、たくさんのお客様に伊勢を訪れていただけていると思います。是非、今後、毎年お伊勢参りにお越しいただければと思います。



## プロフィール

鈴木 健一

(すずき けんいち)

昭和五十年生まれ。平成十五年伊勢市議会議員に当選し、平成二十一年伊勢市長就任。現在二期目。

平成二十二年の長男誕生後、育児のための休暇を取得した。自分自身の育児の経験をもとに、子育てする者が生活しやすい、訪れやすいまちづくり、バリアフリー化を進めている。そして、二十年後を見据え、子どもたちが夢を持ち、市民の皆様が生き生きと健康で暮らすことのできる「笑子幸齢（しょうしこうれい）」まちづくりをめざし取り組んでいる。

## 第六十二回式年遷宮

### 皇大神宮「遷御の儀」 臨時出仕を御奉仕して

結城神社禰宜 宮崎 吉史

この度の十月一日の川原大祓、十月二日の「遷御の儀」に際し、県内神職の代表として神宮臨時出仕を拜命し、御奉仕をさせて頂いた。

十月一日早朝、臨時奉仕者一同は、参籠所である修養団伊勢青年研修センターに集合。潔斎ののち、夕刻より斎行される川原大祓の儀の習礼を行った。

午後四時、小雨の中、祭主以下諸員が祭場に列立し、川原大祓の儀が斎行された。お祓いの後、御神宝辛櫃所役として、御正宮大床下まで奉仕した。

十月二日、愈々「遷御の儀」である。当日の所役は、参列員の傍ら



写真提供 神宮司庁

にて足元を照らす松明所役である。

夕刻、潔斎の後、著装を終え松明に火を灯し、所定の位置にて祭典開始を待った。午後六時、黒田清子臨時祭主以下がお出ましになられ、最後に勅使が列立し祭儀が始まった。同八時、静まり返った浄闇の中「カケコー」という鶏鳴に続き、御扉の開く音が聞こえ、出御が行われた。いざ出御となった瞬間に吹いた不思議な風に、神の息吹を確かに感じた。白い絹垣に囲まれた大御神が新宮にお遷になられたのち、八度拜が行われ四時間に亘る「遷御の儀」は厳粛に斎行された。

漆黒の闇の中、神域内でただひたすらに古儀に則り肅々と祭典を進めている中に身を置くと、遙か昔より引き継いできた重儀に立ち会えた喜びが自然と湧き上がって来た。「遷御の儀」に神職として御奉仕できたことを感謝申し上げ、この経験をかてに神明奉仕に邁進したい。

## 遷御の儀

### 接伴係の奉仕

三重県神道青年会

神宮お膝元の三重県神道青年会として二十年前と同様に、十月二日、五日の両日に亘り御奉仕させて頂く機会を賜った。当会より延べ二十名、三重県氏子青年協議会よりこちらも延べ二十名が略礼服にて奉仕した。

内宮では午前九時、参集殿に集合し説明を受け、午後一時より特別奉拝席での案内を行った。

当日の奉拝者は三千人余り。奉拝席は赤・青・黄色の三区画に分けられ、更に番号によって区域が指定されていた。奉拝者の胸の徽章を目印に、それぞれの入場口へ誘導した。

午後六時、浄闇の中、太鼓の音を合図に神職の一行が斎館より正殿へ。三千人が静寂を保ったまま、同八時、灯りが消された神域を絹

垣に囲まれた御神体が、新宮に向けて出発され、御装束神宝とともにお遷りされた。

奉拝者一同は拝礼ののち退出である。祭主以下奉仕神職の退下と重ならぬよう、迅速かつ安全な誘導が求められた。司会者とうまく連携し、臨機応変な対応ができ、時間内にすべての奉拝者を誘導できた。我々は祭主以下祭員の退下をお見送りし、本宮新宮前の参列員席の片付けを行い、同十時に解散となった。



# 「怠ルコトナシ」 波多神社の特殊神饌

津市一志町八太に、およそ千七百年前、この里の豪族「壺師の波多氏」の氏神として祀られた波多神社（西田きみ子宮司）では、二月の祈年祭には特殊神饌が供えられる。

「往古依り千今一度モ怠ルコトナシ」の社伝により、『八太村産土神御祭日献備物帳』に定められた品数、形状、大きさに切り、湯通しされ熟饌として供えられる。

- 一、御鏡餅三重
- 一、御蒸飯三盛

・餅米を蒸し、先ず丸盛り御飯をつくり残りて鏡餅をつくる。

- 一、御神酒一对
- 一、甲膳 三通り

牛蒡・大根・山芋・里芋・豆腐と蒟蒻は各々三センチ角を二切れ・荒布十センチ・芹



- 一、乙膳 三通り
- 一、一株・大豆七粒・露の臺二つ・鱈の干物

蜜柑二つ・煎餅二枚・樵の实五個・搗栗五個・柿二切れ  
外に 柿串三本・田作り六匹・神馬藻少々・藁にご六筋・箸三

膳・白膠木箸三膳・白膠木楊枝三膳

神饌は主祭神の宇賀神、天水分神、稻倉魂神の三柱分準備されます。餅、おこわ、魚、海藻、野菜、果物、木の実、また、豆腐・蒟蒻の加工品など、大変なご馳走です。しかし、最近では人手困難なものもあり、担当の総代は常日頃から心掛けていなければなりません。

また、この特殊神饌の起源は不明ですが、豆腐や蒟蒻などの製法が伝来した年代から室町時代頃と



推定されています。

長い歴史のある神様へのお供えもの、「怠ルコトナシ」の社伝により関係者の手によって今も引き継がれています。

※藁にご〓稲の穂の芯。わらしべ。

または藁みご。「みご」とは、

藁の皮をとった上部の茎。

※白膠木〓ウルシ科。山野に多い

落葉小高木ウルシによく似るが奇数の羽状複葉に翼があるという特徴ある。秋に紅葉する。別名 フシノキ

# 耳常神社雅楽会の結成

宮司 増田 秀樹

私は、神職を志した時に大きな夢を抱き、四つの目標に向かって懸命にご奉仕して参りました。氏子数が二九四戸ながら、地元の力強い支援に支えられ今日を迎え、今後も神明奉仕に努めて参りたいと思います。

さて目標の一つ目は子供達によ



る舞です。昭和五十七年に始った「浦安の舞」が、小学四年生の子どもたちによって引継がれております。二つ目は、平成十四年に敬神婦人会の結成を計画したところ、氏子総代の協力により二十名の会員で発足、現在三十名の会員によりご奉仕頂いております。三つ目は、平成十七年に本殿の大改修事業に取りかかり、氏子一丸となって完遂しました。四つ目が、雅楽会の結成であります。

平成二十一年六月に氏子地域内に回覧板にて募集したところ、「笙・箎ひちりき・龍笛」三管を見たことも触れたこともない、四十〜五十代の男性四名と女性二名が応募六名でスタートしました。まずプラスチック製の三管を神社にて備え、指導については、多度大社雅

楽会（鯨山会）に依頼し、自主的参加により週一回の指導を受け、平成二十二年十月の例祭には、直た垂た装束たを着て、「越天楽」を初めて奉奏するはこびとなりました。

二年目に入り四十代男性二名が参加し「五常楽急」を習い始め、更に練習を深めるために、社務所での練習を加えました。三年目には「皇馨急おひょうきゅう」に挑戦することとなり、四年目には雅楽会の目標である「浦安の舞」の練習に入りました。平成二十五年より四曲にて、例祭・祈年祭・新嘗祭の三大祭に舞も含め奉奏されています。

苦慮したのが、笙・箎・龍笛の三管と神楽太鼓、さらには楽人装束等の調達でした。特に笙は高額のため、近隣の神社で使われていない笙を借りてのスタートでしたが、年毎に購入を進め、今では三名の方は、自分の管を持っています。しかし、神楽太鼓は予算的に賄えず、崇敬者の支援により簡易型太鼓を備え、「浦安の舞」の



奉奏が可能となりました。

今振り返ると、雅楽のことをまったく知らない人が集まり、不安もありましたが、全員が仲良く楽しみながら熱心に練習を重ね、五年目で立派に奉納出来るようになった姿を、氏神様もお喜びのことと思います。

今後、将来にわたって永く受け継がれ、当神社で雅びな調べがいつまでも奏でられることを願っております。

鎮座地 三重郡菰野町小島

# 「伝統行事の復活から御造営へ」

度会郡玉城町に鎮座する田丸神社（見並倫宮司）では、恒例祭典を継承していくだけではなく、伝統行事の復活や御造営事業を通し、氏子地域を巻き込んだ積極的な教化活動が行われている。

見並宮司は、平成十五年に当神社に奉職、八年後の田丸神社の式年御造営を念頭に活動の模索を始めた。また御造営は、境内諸施設の改築のみではなく、その事業を通して、広く地域の人々にとって神社が親しみある存在となるよう関心を高めていく、最大の機会であると宮司は語る。

出身地でありながら、宮司にとって、奉職当初の人脈は充分とはいえなかった。そのため、日々の奉仕で培われる人脈に加え、新しい組織づくりにより更なる関係構築に向けての取り組みをスタートさ

せた。まず、平成十一年から担ぎ手不足で休止していた天神神輿である。寛延元年（一七四八）につくられて以来続く伝統行事は、神輿巡幸区域十三町を三つに分け毎年町内会主導の輪番奉仕であった。朝九時から夜十時まで練り歩く過



酷な巡幸は奉仕者の確保を困難にしていた。試行錯誤を繰り返しながら新たな人材を掘り起し、伝統行事に対する意識改革に取り組んだ。奉仕者自らの費用負担と率先奉仕、それが地域の理解と協力を発展すること、また、自らの心の財産になることを説いた。平成十六年に試巡幸がなされ、翌年に二百名を超える若手の奉仕者により、盛大に町全体で取り組む田丸神社神輿保存会が結成された。

この保存会は御造営事業にも貢献することになった。初めて経験する本格的な御木曳行事を平成二十一年五月に控え、造営委員会を援け、地域の区長や諸団体等とも連携し、地域一丸の前例のない行事となった。更に二十三年五月、御木曳が高まった機運を受け、当初予定になかった御白石曳行事へと展開する。以前は他地区から借りていた奉曳車も奉製するに至った。平成二十三年十一月の遷座祭や同奉祝祭まで様々な祭儀等にも奉



仕し、神社と氏子との距離を近づけ、深く記憶に残すことになった。何よりも氏子たちが祭りをつくり上げ、本当の「奉仕の喜び」を実感したことは大変意義深い。





# 美多羅志神社の龍神様



緑のコーナー

鳥羽市の離島、答志島に鎮座する美多羅志神社（橋本好史宮司）は創建年代に関しては不詳であるが、一番古い棟札には江戸時代「享保8年（1719）金龍山円通寺の子敬法印」の名で残っており、この他に宝暦9年（1759）・安永8年（1779）等20年ごとの7枚の棟札が残っている。



美多羅志神社の「美」とは尊称で、「多羅志」は古代の海人族の「タラシ」一族に由来するといわれ、答志の海人族が神功皇后（オキナガタラシヒメ）に従って新羅征伐に行った伝説に因んでつけられた社名である。

禊屋制度が残っており1月4日と6月15日に町内をあげての祭典が斎行される。

ある年の大祭の日に、宮世話人が境内にある椎の木の枝の折れ曲がり具合が「龍の顔」そっくりなのを発見した。この椎の木は、高さ15メートル、根元の幹回りは約2メートルあり、樹齢は100年を超えていると思われる。



海の神である龍神を深く信仰していた神功皇后にゆかりがある神社であるので、龍の顔が出現したと言われている。

島の守り神としての信仰の他に、子授けの神様としても有名である。（鳥羽市答志町984）

教化にともなう原稿・ご意見を募集しています。（下記編集委員まで）

教化部長	森本 巖	（北牟婁）
編集委員長	宇治土公貞尚	（伊勢）
委員	秦 昌弘	（四日市）
〃	平野 直裕	（桑名）
〃	新山 英洋	（員弁）
〃	宮田 幸尋	（上野）
〃	西尾 直也	（志摩）
〃	多田久美子	（津）
〃	中山 清治	（松阪）
〃	原 忠照	（神社庁）

御社名欄にご利用下さい。

発行所 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成26年6月30日